【研究発表①】

程 雪茹「「孔子立言」と「庶人受命」―鄭玄の西狩獲麟説の成立―」

「西狩獲麟」は経学史上『春秋』に関わる最も重要な事件である。経文では隱公から始まり、哀公十四年の「獲麟」で終わるため、漢代の儒者たちがこの神秘的な結末と麟が突然現れたことに深い興味を抱いた。『春秋』は「正名」の書であり、孔子の「微言大義」を含有するとされるため、「獲麟」が結末となっていることに含まれた「言外の意」が、漢代の公羊学派と左伝学派の議論の焦点となった。その中で、今文と古文をともに研究していた鄭玄の「西狩獲麟」に関する解釈は特に注目に値するのである。 先行研究によれば、鄭玄が「獲麟」事件を解釈する際に各家の説を統合した傾向が見られ、それ一方で、左氏家の修母致子と立言説の間、彼が陳欽の立言説を選び取り、賈逵の讖緯に基づく解釈を採用していない。では、なぜ讖緯を信じる鄭玄は賈逵の説を選ばず、立言説を支持して「獲麟」事件を解釈したのか。これは一見『春秋』経の解釈の問題に過ぎないように思われるが、実際には鄭玄の『春秋』に対する全体的な理解と孔子が『春秋』を著したという事実への理解と密接に関連している。 そのため、本稿ではまず左氏家と公羊家が「獲麟」に対して異なる解釈に着目し、その解釈の相違を明らかにした上で、公羊家と左氏家の説において最も核心的な相違点が何であるかを考察する。次に、鄭玄の説と賈逵 や服虔の説を比較し、麟の徳の帰属という視点から、『春秋』や孔子が『春秋』を著した事実に対する彼らの見解の相違を議論し、鄭玄が立言説を支持する理由を探求する。最後、本稿では鄭玄が「獲麟」の問題を論じる際に『洪範五行伝』と『月令』を引用して構築した「四時－五行」の体系を焦点に当て、彼がどのようにこの体系を用いて『春秋』を解釈するのかという問題を検討する。